

中小企業の決算書の見方

企業の経営者が決算書を見て会社の状況を理解するには、
5つのポイントに注力して確認しましょう。

株式会社 稲田財務

東京都大田区中馬込 3 - 1 - 3 - 3階

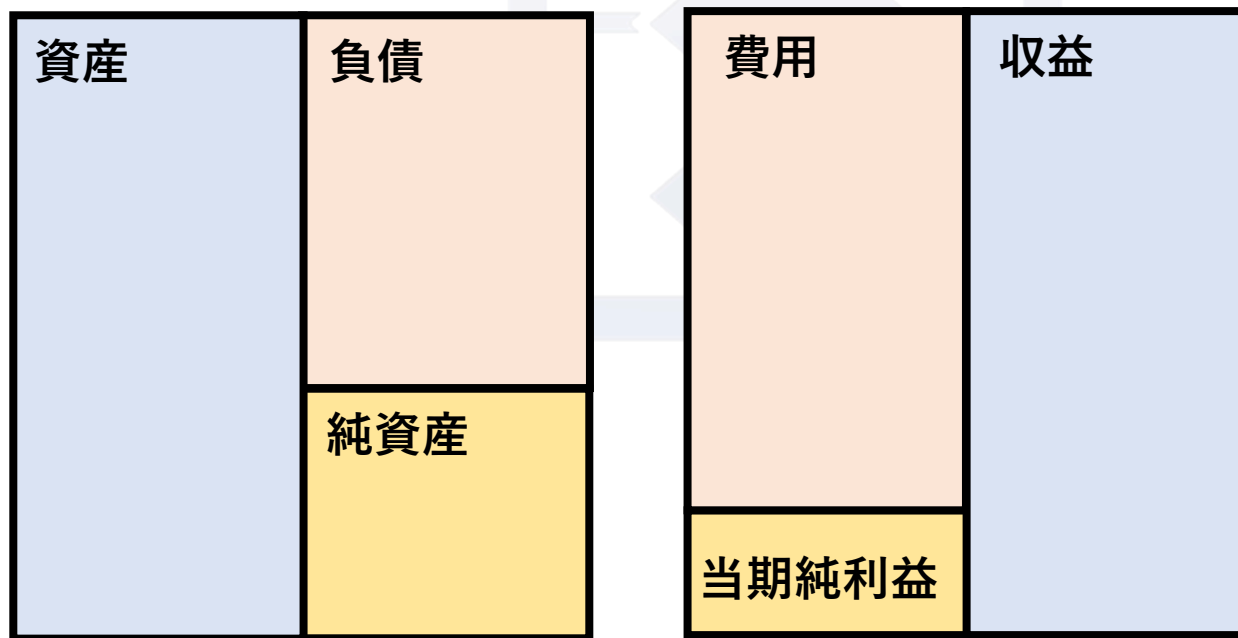
TEL : 03-6319-5822

Mail : info-ifl@inadazaimu.jp

シート使用上のご注意

本資料は財務の知識のない方でも理解できるようにできるだけ簡単な用語を使い説明をしています。そのため一般に使われている勘定科目ではなく敢えてわかりやすく表現している語句もあります。言い回しにご注意ください。

また、本資料は中小企業を前提に作成しております。そのため、上場企業等の大企業とは決算書の記載が違う個所もございます。この点に関してもご了承ください。



はじめに

中小企業の経営者が決算書を見て会社の状況を理解するには、どこにポイントをおけば良いでしょうか。これは銀行が融資の審査のためのものとは少し違うので注意してください。

経営者・・・会社の状況、経営の意思決定

銀行・・・会社の状況、融資の可否、金利の決定

経営者は決算書（試算表）を見て会社の状況を把握し、意思決定の基準にするものだと思います。

そのため決算書を見るための特に重要な項目を5つご紹介します。

1. 変動費と固定費⇒損益分岐点 P/ L
2. キャッシュフロー P/L、B/S
3. 自己資本比率 B/S
4. ROA（総資産利益率）P/L、B/S
5. 債務償還年数 P/L、B/S

1. 変動費と固定費⇒損益分岐点

制度会計では製造業等は製造原価報告書（C/R）の作成が義務付けられています。この製造原価報告書は製造等に関わった全ての費用を計上しなければなりません。

しかし、これらの費用の中には売上の増減に左右されないものが多数含まれているため各決算期で粗利益率が大きく変動してしまう可能性があります。

例えば、工場の家賃は売上の増加に左右されずに基本的には每期一定金額であるため、売上が増加したときには原価率が減少し、売上が減少したときには原価率が増加するという現象が起きてしまいます。

これでは現状把握から将来の予測・計画を行うことが難しくなってしまいます。

この問題を解決するものが**直接原価方式**の採用です。

つまり、売上の増加に伴って増加する費用、売上の減少に伴って減少する費用のみを原価（変動費）として捉えます。一般的には、材料費と外注費がこれに該当します。

1. 変動費と固定費⇒損益分岐点

3月 製品100個販売 4月 製品50個販売

材料	2,000	材料	1,000
労務費	1,000	労務費	1,000
外注費	1,000	外注費	500
減価償却費	700	減価償却費	700
家賃	500	家賃	500
合計(原価)	5,200	合計(原価)	3,700
一個当たりの単価	@52	一個当たりの単価	@74



3月 製品100個販売 4月 製品50個販売

材料	2,000	材料	1,000
労務費	1,000	労務費	1,000
外注費	1,000	外注費	500
減価償却費	700	減価償却費	700
家賃	500	家賃	500
合計	5,200	合計	3,700
一個当たりの単価	@30	一個当たりの単価	@30
変動費	3,000	変動費	1,500

この作業は各人が損益計算書（販売費及び一般管理費の内訳書）と製造原価報告書を基に行わなければなりません。手順としてはまず変動費を確定させ、それ以外を固定費とします。また、変動費は企業の実態に沿って区分しなければならないため企業の状況をしっかりと把握することが大切です。

変動費＝期首製品＋期首仕掛品＋当期材料費＋当期外注費－期末仕掛品－期末製品

このように変動費と固定費を区別することではじめて損益分岐点を求めることができるのです。

1. 変動費と固定費⇒損益分岐点

損益分岐点比率

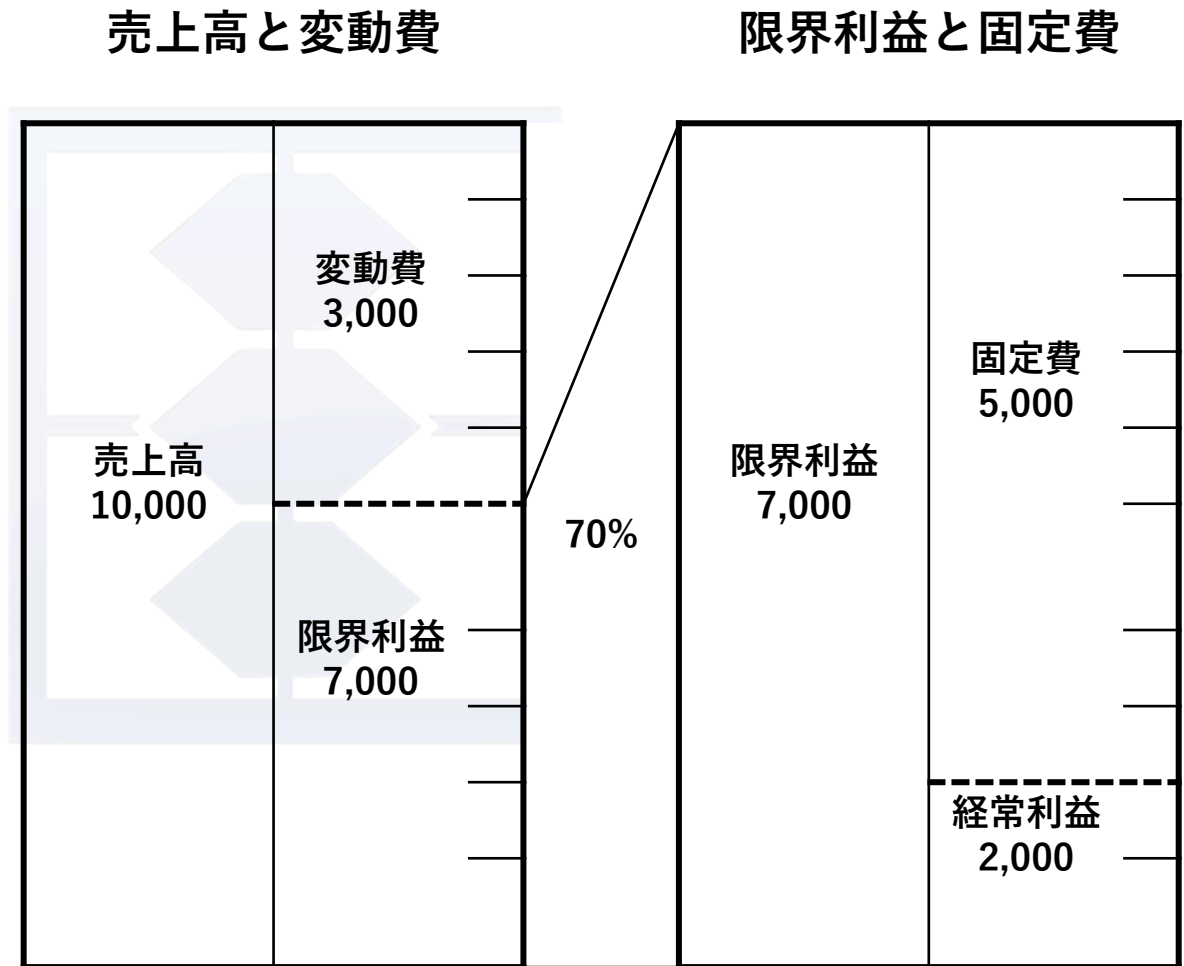
固定費 ÷ 限界利益 × 100

$5,000 \div 7,000 \times 100 \div 71.4\%$

損益分岐点売上高

固定費 ÷ 限界利益率

$5,000 \div 0.7 = 7,142$



2. キャッシュフロー

キャッシュ・フローとは、現金の流れを意味し、主に企業活動や財務活動によって実際に得られた収入から、外部への支出を差し引いて手元に残る資金の流れのことをいいます。損益計算書と異なり、現金収支を原則として把握するため、将来的に入る予定の利益に関してはキャッシュフロー計算書には含まれません。経営者の皆様が確認するのは決算書や月次試算表から簡易キャッシュフローで十分です。

簡易CF = 当期純利益 + 減価償却費 - 元本返済額

1,000万円 + 500万円 - 2,000万円 = ▲500万円

※最終利益で1,000万円出すことができたが1年通して経営した結果、500万円現預金が減った。

3. 自己資本比率

自己資本比率の考え方ですが誰のお金で会社を経営しているかということです。

自己資本（資本金、利益の蓄積）と他人資本（銀行などの借入）の割合を見るものです。当然ながら自己資本の割合が高いほうが安全性が高い（破綻しにくい）ということになります。

中小企業の平均は10%前後といわれていますが40%を目指します。

資産 200	負債 160
	純資産 40

$$\text{自己資本比率} = \text{純資産} \div \text{総資産} \times 100$$
$$40 \div 200 \times 100 = 20\%$$

自己資本比率が高いほど負債（借入金）が少ない
自己資本比率が低いほど負債（借入金）が多い

4. ROA（総資産利益率）

ROAの数値を見ると、その会社の資産（B/Sの左側）でどのように利益を生み出しているかがわかります。ROAの数値が高くなればなるほど、効果的に利益を生んでいる会社といえます。

ROAの数値を高めていくためには、2つの方法があります。1つは、売上高に対する利益率を上げていき、収益性を高めることです。もう1つは、総資産を減らして、効率性を高める方法です。具体的には不要となった固定資産などがあれば売却することで、総資産を減らすことができます。つまり、ROAが高い数値になっている会社は、収益性と効率性に優れているということになります。

一般的に、ROAの数値が5%を超えていると優良企業だといわれていますが私達は10%を目指すように伝えています。

$$\begin{aligned}\text{ROA} &= \text{経常利益} \div \text{総資産} \times 100 \\ 1,000\text{万円} \div 2\text{億円} \times 100 &= 5\%\end{aligned}$$

利益を出すこと！

利益を産まない資産を処分すること！

5. 債務償還年数

債務償還年数とは簡単に言えば銀行から借りているお金を今の経営状況から何年で返済できるかということです。

目安としては10年以内になっていなければならないのです。

簡易的には利益と減価償却、借入金の元本返済で計算しますが、正確には現金や経常運転資金、高額な役員報酬、特別損失なども考慮して試算します。

百万円

資産	負債
200	160
	純資産
	40

債務償還年数

$$= \text{借入金の総額} \div (\text{当期純利益} + \text{減価償却費})$$
$$1\text{億円} \div (1,000\text{万円} + 500\text{万円}) = 6.7\text{年}$$

10年以内が望ましい。

加点として特別損失、現預金、高額な役員報酬、経常運転資金を借入の総額から引く。

おわりに

以上、5つの決算書の見方をお伝えしましたが、比較するものがないと自社がどのような状況にあるのか把握できません。比較するための指標は、

1. 前年（前月）
2. 計画
3. 業種平均

において確認すればよいと思います。

決算書を深読みできる経営者は、

- ・ 企業価値を上げることができる
- ・ 金融機関からの信頼度が高まる
- ・ 窮境の原因を究明できる
- ・ 利益や現金がいくら会社に残るのかを把握できる
- ・ 現状把握⇒問題抽出⇒解決策の手を打てる

ことができます。

最初は苦労するかもしれませんがいつか必ず見えてくるものがあり、その見え方がどんどん広がっていきます。諦めずにこのレポートを繰り返し読み込んでご理解していただき、皆様の経営のお役立てとなれば嬉しく思います。